

島田正治

今はメキシコへ戻ってきてほっとしている。というのも、今年の日滞は期間中、四月には東京、銀座の文藝春秋画廊展、五月には京都文化博物館展と二つの展覧会を開き、この準備と労力はかつてなかった。東京と京都を新幹線で往復すること数度、それもこれも一泊でもするのならわかるがそうではない。始発の電車に乗り、終電で帰宅、戻るといふ、日帰り網渡りの旅程でもあった。

しかし、過度のプログラムも無事みな終えることができたのである。日本の友だちとも会って話すこともできなかった。とにかく忙しすぎた。一発まちがって事故があったり、病気でもしたらどうなるか、その心配はいつも頭の奥にへばりついてた。京都では小学校時代、また高校時代の同窓会があり、それには出席した。会に出席、顔を出してみようという年令にもなった。どうがんばっても、せいぜい二十年、そう何十年もないだろう。顔を合わせるだけでよい。人生七十歳余、感慨深いものがあった。

\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\*

同じ町内に育った塩田純造君は、今、理髪業を営んでいる。もう六十年近く会ってはいなかった。少年時代の面影はなく、髪の毛は黒々としている。とてもとても同年輩とは思えない。聞くと、「商売柄、お客さんの前に白髪では立てない。髪の毛は全部染めておる。まゆげまでも。」と話した。そうでなかったら、きっとあなたのように真白でしょうと言った。さもありません、それぞれ商売商売の思わくがある。

\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\*

中学校、高校と同じだった塩野淳次郎君はよく同じクラスになった。音楽鑑賞に秀でており、クラシックの名曲などに熟知していた。成人してから音沙汰なしだったが、今から十二年前、わたしが京都市国際交流会館で展覧会を開いた折り、来てくれ四十数年振りの再会となったが、とてもよく絵をよく見てくれ、「絵が描けるといいな」「芸術がわかるということはどんなに人生が豊かになることか」と、しみじみ話し、今回も同様、絵の見方感じ方などを語った。

\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\_\*\*

京都の古い友人の鈴木朗仙氏にも久しく会うことがなかった。それが展覧会に来てくれて、その朗仙氏が「もう使うことがないから」と言っ、古墨と画仙紙をわたしに贈られた。「何も心配することはないぜ」と。ありがたく頂戴することにした。墨は青墨で、タテ四・五センチ、ヨコ三センチ、厚さ一センチ、硯型をしていて、持つとじつに軽い。香料のにおいが強い。ただよう。横には程君房製とある。貴品にあふれている。

さっそく試墨してみた。その墨色は淡くなればうすいほどよい。色の彩かさは、この世のものとは思われない。何たる深みと味わいのあるものか。もう、わたしはうれしくてうれしくて、天に舞うとはこのことか、と、今もこの墨を愛でるのである。

・・・次号につづく

ご意見・ご感想は  
sumi@arte-shimada.com  
までお送りください。